関西経済特集

「大学発VB」活発に

創薬支援などバイオ中心

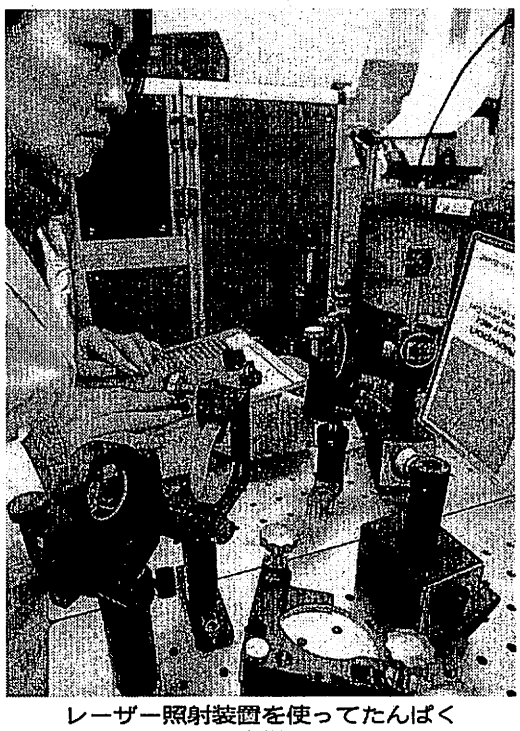
大学の研究成果を事業化する「大学発ベンチャー」が関西でも増えてきた。京阪神は医・工学系研究者の層の厚さを反映し、創薬支援などのバイオベンチャーがその大半を占める。株式公開を果たしたアンジェスMGや総合医科学研究所に続く成功例が出てくる可能性は高い。

■

「買収されるのはいやなので株式公開はしませんよ」。阪大のキャンパス内に研究室を構える創晶（大阪市）の安達宏昭社長は言う。同社はたんぱく質結晶化技術を持つ阪大発の創薬支援ベンチャーだ。

病気の原因となる酵素たんぱく質などの働きを阻害する低分子化合物を設計できれば医薬品の開発につながる。このためほど。解析の前提となるたんぱく質の形を特定するのが、たんぱく質の結晶化だ。

安達社長らは阪大の研究者として「フェムト秒レーザー」という特殊な光線をたんぱく質に当てると結晶の核ができることを発見し、この技術を高一億円を目指す。



レーザー照射装置を使ってたんぱく質結晶をつくる大学発ベンチャーの創晶（大阪府吹田市の大阪大学）

形の特定にはX線構造解析などが必要で、武田薬品工業も二百八十億円を投じて解析技術を持つ米シリックスを買収した基に二〇〇五年七月に起業した。

「これまで世界トップレベルの研究機関で結晶化率は二〇％程度。我々は六七％を誇る」と胸を張る。創晶は〇五年度は大手製薬会社などから二十六件を受注し売上高は三千万円。〇六年度は受注三十五―五十件、売上

研究機関・産業の集積強み

京都市内のベンチャー育成施設「クリエイション・コア京都御車」に研究室を持つのはプロテインクリスタル（大阪市、森壜社長）。

昆虫に感染するウイルスは昆虫が冬眠している間は、自らたんぱく質の〝家（多角体）〟を作り、その中に入って越冬する。森社長らが京都工芸繊維大で多角体を研究し、この多角体の中にたんぱく質分子などを封じ込める技術を開発した。

医薬品メーカーなどから様々なたんぱく質を受託生産し、長期保存できるようこの多角体に納めて販売する事業をしている。現在は増殖因子などを多角体に封じ込めると、ゆっくりと外部に放出される現象を応用し、各種細胞を培養して再生医療に使う研究などもしている。創薬支援ビジネスを拡大する考えだ。

神戸市のポートアイランドの「医療産業都市」。ここに本社を置くジーンメディスンジャパン（神戸市、阪井寛史社長）は神戸大発のバイオベンチャーだ。

後藤章暢会長（現兵庫医科大教授）や白川利朗取締役（現神戸大助教授）らが〇三年一月に立ち上げ、遺伝子治療に使うウイルスのベクター（遺伝子の運び屋）を製造し、医薬品メーカーなどに供給する。国際的製造管理基準のGMP基準を満たす国内初の設備でベクターを供給する。

同社は卵巣がんや前立腺がんの治療薬開発にも着手した。がん細胞を殺すウイルスと、免疫力を高めるがん細胞ワクチンを組み合わせた治療薬で、がん患部の治癒と転移防止が同時に可能になる。〇七年にも中国・広州市で、患者を対象にした臨床試験を実施する計画だ。

■

経済産業省の調査によれば、国内の大学発ベンチャーは〇六年三月までに千五百社を突破し、うち近畿二府五県は二百九十九社で二割を占める。近畿の大学発ベンチャーの四〇％がバイオ系で、バイオに限れば阪大と東大は同数で一位、京大と筑波大が二位。関西勢の健闘が目立つ。

関西には大学や医薬品産業が集積しており、世界に飛躍するバイオベンチャーの誕生も期待できそうだ。

ファンド設立

国民生活金融公庫は二〇〇七年三月末まで、中小企業新事業活動促進法は今秋、関西地方を中心とする近畿以西のベンチャー企業に投資するファンド（基金）を設立した。出資額は三十億円で、同社が運営するファンドでは過去最大だ。

京都市に本拠を構える金融機関が低利融資や事業相談などの支援体制を拡充している。

事業計画、資金調達、オフィス、広告宣伝、海外展開――。ベンチャー企業が直面する様々な問題を解決し、成長を助ける取り組みが関西で増えている。自治体や公的機関ばかりでなく、民間企業がベンチャー支援に乗り出す例も目立つ。官民がそろって後押しすることで回復基調に入った関西経済をさらに活性化したい考えだ。

ずばり強み表現

このプレゼン資料を製作したのは中堅広告会社アイドマはこの点に着目した。CGやイラスト、興企業を後押しする。多くの広告会社は新聞や雑誌、インターネット向けの広告を受注すると製作を外部に委託し、結果として製作費が高くつく。

これに対し、アイドマは自社で約五十人のデザは海外展開を後押しする。このほど東京の本部と大阪の近畿支部で、中小企業の関心が高い中国とインドの専門相談員を合わせて五人増員し、十五人体制とした。

元商社マンなど現地事